こちらの特典は「お兄さん」の心情が分かるよう、特別に調整したシナリオ台本です。

一部セリフ、シチュエーションは実際の収録内容と異なっている箇所もございます。

あくまでシチュエーションイメージの補足としてお楽しみくださいませ。

バイノーラル企画
【ＡＳＭＲ／耳かき／耳のオイルマッサージ添い寝】
お世話好きなお隣の娘さんが甘々すぎる（仮）

脚本　日暮茶坊

■登場人物

美波（みなみ）　16歳、女性。
・一人称はわたし　主人公を「お兄さん」と呼ぶ。
基本丁寧語。主人公のお隣の部屋の娘さんで高校２年生。
母親と二人暮らし。前作でのアレコレで主人公に対して明確な好意を抱いている。
元来の世話好きな性格が今度の温泉旅行でも遺憾なく発揮される。

あなた　ごく一般的な社会人男性。
声などは出さない。

○トラック1

■玄関の前
夏のある日。
美波はウキウキしながらリュックを背負って隣の主人公の家へ向かっている。

//SE：インターホンの音

【9】ドア越しに聞こえる声
美波「お兄さん、お出かけの支度終わってるかなぁ」

美波「最近また疲れてるみたいだったし……」

美波「昨日寝ちゃって、今頃慌てて準備してたり……」

美波「もしかしたら、まだ寝てるなんてことは……。いやいや、それはないよね……」

//SE：ドアを開ける音

【9】
美波「あ、お兄さん。こんにちは！」

美波「（小声で）よかった、起きてた……」

美波「あっ、いや……その、なんでもないですよ？」

美波「え!? 聞こえてた!? ご、ごめんなさい……」

美波「そ、それはそうと。ちゃんと覚えてましたか？
今日は温泉旅行ですよー！」

主人公（もちろん覚えてるよ）

美波「そんなわけで、お迎えに来ました！」

美波「あの、もうすぐ出る予定の時間ですけど……ちゃんと準備はしてますよね？」

主人公（準備できてるよ）

美波「（ほっとして）よかったー。まだだったら急いで手伝わないといけないなぁ、なんて考えちゃいました」

美波「っていうか、よく見たらちゃんと着替えも終わってるし、さっすがお兄さんですね♪」

美波「それじゃ、行きましょうか」

美波「駅まで歩く時間とか、余裕をもって行動するのが大事ですからね」

美波「ふふっ。わたしなんて、二時間前にはソワソワしちゃって、部屋の中をくるくる歩き回っちゃってました」

主人公（2時間前って、早すぎるよ）

美波「えへへ……。実は昨日もなかなか寝付けなかったんですよー。子どもみたいですよね」

美波「でも……お兄さんとふたりで旅行なんて、ドキドキしちゃって……」

主人公（え、ふたり？）

美波「え？　ふたりきりなのかって？（不思議）」

美波「はい、チケットはお母さんのですけど、忙しいからって。わたしたちふたりだけですよ

美波「お母さんからお兄さんに連絡行ってるはずですけど……」

美波「もしかして、忘れちゃったんですか？」

主人公（そういえばそうだったかも……）

美波「しっかりしてくださいよー。やっぱり、また働きすぎで頭回ってないんじゃないですか？」

主人公（でも、ふたりっきりでなんて……）

美波「あ……（気づき）わたしとふたりっきりで旅行っていうのが引っかかってるんですね……」

美波「お母さんも良いって言ってるし、わたしだって……」

美波「あー……。もしかしてお兄さん、わたしとふたりっきりで後で問題にならないかーとか、心配なんですね？」

美波「あははっ。お兄さん、心配しすぎですよー」

美波「お母さん公認ですから、何も問題ありません！後ろめたいこともなにもないんですから、堂々としてたらいいんです」

主人公（堂々っていわれても……）

美波「それでも躊躇するってことは……」

美波「もしかして……。わたしと旅行っていうのが嫌……だったりします？」

主人公（嫌とかそういうのじゃ……）

美波「わたしはお兄さんとふたりで温泉旅行……。楽しみにしてたんです……」

美波「お兄さんも楽しみにしてるって思ってたのに……」

主人公（お、俺も楽しみだよ）

美波「えへへ……。ごめんなさい。意地悪しちゃい

ました」

美波「でも、ちょっと心配しちゃいましたよ。行きたくないとか言われたら、どうしようかと思っちゃいました」

主人公（そんなこと言わないよ）

美波「えへへ。やっぱり、お兄さんも楽しみだったんですね。なんだか嬉しいなぁ♪」

美波「それじゃ、ふたりで楽しく行きましょう♪」

主人公（うん、そうだね）

美波「ほら、お兄さん。早く荷物持ってきてください！」

美波「もたもたしてると電車乗り遅れちゃいますよ―」

主人公（わかったから、ちょっと待ってて）

//SE：主人公が荷物を取りに行く足音

【13】遠くで小さくつぶやくように

美波「もう、お母さんったら『私に任せときなさい』なんて言って、何もしてなかったなんて……」

美波「でも、よかったぁ……。お兄さんを癒やす計画いっぱい立てたのが無駄になるところだったぁ」

//SE：主人公が戻ってくる足音

【1】

美波「おかえりなさい。忘れ物はないですよね？」

主人公（うん、大丈夫）

美波「それじゃ、行きましょう！　早く早くー！」

//SE：歩き出そうとして躓く

美波「わっ！！」

主人公（危ないっ！）

//SE：ガシッと抱きかかえる音

//SE：美波の吐息の音

【8】抱きかかえられている

美波「……あ、ありがとうございます」

美波「派手にコケちゃうところでした……あはははは」

美波「旅行前に怪我しちゃったら、笑い話にもならないですもんね」

美波「はぁぁ……。ほんと、助けてもらって、ありがとうございます」

美波「（抱っこされてるのに気づく）あっ！　こ、これって……、お兄さんに抱っこされちゃってる——！」

美波「あの、降ろしてくださいっ！　は、恥ずかしいですからっ！」

//SE：バタバタと暴れる音

主人公（ご、ごめん）

//SE：降ろしてもらう音

【1】

美波「ふぅ……」

美波「って、あっ！　ご、ごめんなさい。助けてもらったのに……」

美波「抱っこって気づいたら恥ずかしくなっちゃって……すみません」

美波「あっ、もちろんお兄さんが嫌とかそういうのじゃないですからっ、むしろ嬉しかったというかその……えっと……」

美波「あぁ……。楽しみすぎて、ちょっと浮かれてたみたいです、反省します……」

主人公（気持ちはわかるよ）

美波「ふふ、正直に言ったら、なんだか色々ホッとしちゃいました」

美波「楽しい旅行にしましょうね」

美波「それじゃ、気を取り直して出発しましょう！」

主人公（美波ちゃんの、荷物持つよ）

//SE：荷物を持つ音

美波「あっ！　そんな、大丈夫ですよ。荷物は自分で持ちます！」

美波「わたしの荷物すごく重たいですから……」

主人公（ホントだ。重い……何が入ってるの）

美波「今日のために準備してたら、色々増えちゃって……中身はその……まだ内緒ですけど」

主人公（内緒……？）

美波「と、とにかく！（動揺）今晩、楽しみにしてくださいね♪（勢いで言い切る感じに）」

○トラック２

■旅館の部屋

//SE：ふすまを開ける音

【１５】

美波「（背伸びをしながら）くぅ～……。はぁ～」

美波「ここがわたしたちのお泊りするお部屋なんですねー」

美波「ふふ、畳のいい匂いがしますね。それに、すっごくひろーい！　これならのんびりとくつろげちゃいますね」

//見て回って

美波「うんうん。まさに温泉旅館、って感じの部屋ですねー。わたし、気に入っちゃいました！」

美波「ずーっと泊まっていたいぐらいですよ」

主人公（それはもはや住みたいってこと？）

美波「（微笑んで悪戯っぽく）お兄さんとなら、ここに一緒に住んでもいいですよ？」

美波「なーんて、冗談です♪」

美波「ここからじゃ学校行けないし。お兄さんも会社行くの大変ですからね」

美波「住むなら便利性大事です！」

主人公（え、そういう問題なの？）

美波「大事なことですよー。不便だと色々と大変ですから」

主人公（それはそうだけど……）

美波「あっ、そうだ。窓の外も見てみましょう。きっと良い景色が見えますよ」

//SE：窓へかけていく足音

//SE：窓を開ける音

【9】

美波「わぁ～！　すごくいい景色……山の緑と空の青さが綺麗です……」

美波「写真撮ってお母さんにも見せてあげないと」

//SE:スマホカメラのシャッター音

美波「駅から旅館に来るまでも思いましたが、空気も澄んでて気持ちいいですねー」

美波「えへへ。長い時間、電車に乗って来たかいがありましたね♪」

美波「ほら、お兄さんもこっちこっち」

//SE：主人公が窓へ向かう足音

【7】

美波「ね、すごくいい景色ですよね」

主人公（本当だ。まさに絶景だね）

//SE：風の吹く音

美波「風も涼しくて、気持ちいい……」

美波「これならエアコンいらないぐらいですね。とても真夏とは思えませんよ」

主人公（ほんとうだ。緑が多いからかな）

美波「まさに避暑地。って感じですね」

主人公（自然を感じるのっていいね）

美波「窓から色々見るだけでも自然を感じますね。結構遠くまで見えますし」

美波「あっちは何があるんだろ……」

美波「……あっ、あそこ。旅館の庭になにかありますね……。小さいお風呂みたいな……なんだろ……」

美波「旅館のパンフレットに書いてるかもしれませんね」

//SE：パンフレットをめくる音

美波「（小声）えーっと、案内地図……」

美波「……ふむふむ」

主人公（なにかわかった？）

美波「わかりました、あそこには足湯があるみたいですよ！」

主人公（へぇー足湯かぁ）

美波「足湯に入りながら、日本庭園を一望出来るみたいです」

美波「これは絶対行かないとですね……」

美波「体の疲れと、心の疲れが一緒に取れるってことですよ」

主人公（そうだね）

美波「それじゃ、さっそく……」

美波「(気付いて) あ……。でも、疲れてるからまずはのんびりしたいですよね」

美波「わたし、またひとりでテンションあがっちゃって……すみません」

主人公 (大丈夫だよ)

美波「それじゃ、少し休んでからってことで」

主人公 (今からじゃなくていいの……?)

美波「足湯も景色も逃げませんから、のんびり楽しみましょう」

美波「慌てて行っても、ちゃんと満喫できなかったら意味ないですからね」

美波「とりあえず、お兄さんはゆっくり景色みててください」

美波「わたし、お茶でも入れますね」

//SE：カチャカチャと茶器を扱う音

【12】

美波「ふふっ。なんか、こういうのもいいなぁ」

//SE：ポットから急須にお湯を入れる音

//SE：主人公が座る音

【2】

美波「もう景色はいいんですか?」

主人公 (うん)

美波「じゃあ、座ってのんびりしましょうか」

美波「ふふ。それにしてもこんな良いところに泊まれるなんて、招待券くれたお母さんに感謝です」

主人公（そうだね、お礼言わないと）

美波「何か美味しそうなお土産でも買って帰らないと」

主人公（うん）

美波「あ、お茶は今蒸らしてるので、もうちょっと待ってくださいね。この茶葉はしっかり濃い方が美味しいはずです」

美波「でも、蒸らしすぎて渋くならないように気をつけないと……」

美波「（小さい声で）そろそろかな……」

//SE：湯のみ茶碗に煎茶を入れる音

美波「（お茶を渡しながら）はい、どうぞ♪」

主人公（ありがとう）

美波「熱いから、やけどしないように気をつけてくださいね」

//SE：お茶を飲む音

美波「そんなこと言ってわたしも、気をつけないと……」

美波「（お茶に息を吹きかける）ふー……ふー……ふぅ〜……」

美波「（すすって……）はぁ〜……。美味しい」

美波「ふふ。旅館のお茶ってなんだかいつもより美味しく感じますよね」

主人公（あーわかる）

美波「雰囲気とか、旅行にきてるっていう特別感もあるんだと思いますけど……」

美波「あ、もう一杯、どうですか？」

主人公（じゃあ、もらおうかな）

＝湯飲みを受け取り、お茶を注ぐ

美波「はい、どうぞ」

＝しばらくふたりでお茶を飲む。

美波「（微笑み）こうやってふたりでのんびりするのって、なんていうか……長年連れ添った夫婦みたいでいいですね」

主人公（えっ、老夫婦ってこと？）

美波「おじいちゃん、おばあちゃんになっても一緒に座ってお茶を飲むのって、なんだか憧れません？」

美波「ずっと仲のいい夫婦って感じするじゃないですか」

美波「余計な言葉なんていらない、みたいな」

主人公（なるほど、そういう感覚は良いよね）

美波「わたしもお兄さんと、そのぐらいの関係になれたらなぁ……」

美波「そうしたら、考えてること全部わかっちゃうのに」

主人公（それは思考が読まれてそうでなんかやだなぁ）

美波「あっ、でもお互いだとすると、わたしの考えてることも全部バレちゃうのか……」

美波「う～ん……（悩み）」

美波「うん。お兄さんにならバレてもいいです」

主人公（えっ、いいの！？）

美波「だって、お兄さんにバレてまずいことなんて考えませんから……。ふふ♪」

//時間経過

//SE：湯呑を机に置く音

【3】

美波「ふぅー……。なんだかすごくリラックスしました。お茶の効能ですかねー」

主人公（リラックス効果あるっていうもんね）

美波「お兄さんも休めました？」

主人公（うん、なんか落ち着いた）

美波「あっ、そうだ！　お兄さん。肩凝ってたりしませんか？」

主人公（あー、うんまあね）

//SE：美波が主人公の後ろへ移動する音

【5】

美波「せっかくなんで、わたしが肩揉んであげますね」

主人公（え、いいよ）

美波「わたしの荷物も持ってくれましたし、日頃の疲れもいーっぱい溜まってますよね？」

美波「だから、遠慮なんてせずに、素直に肩揉みされたらいいんですよー」

主人公（……じゃあ、お願いしようかな）

美波「ふふ、ガッツリほぐしてあげちゃいますから」

美波「お母さんで練習した成果、みてくださいね」

//SE:肩を揉む音

美波「んー……。んしょ、んしょ……。はぁ。お兄さん肩ガッチガチですよー」

美波「これ、本当に肩ですか……。ってぐらい硬いです」

美波「こんなになるまで毎日お仕事頑張ってるんですね……」

美波「すごいですけど……。体も大事にしないとダメですよ」

美波「お兄さんはもっと自分の体を大切にすべきです。こんなになるまで頑張るのは酷使って言うんですよ」

主人公（……そうかも）

美波「クスッ。なんて、わたし偉そうに注意しちゃってますけど、お兄さんのことを心配してるから言ってるんですからね」

美波「それに、今回の旅行はお兄さんを癒やすためのものなんですからね」

主人公（えっ、どういうこと？）

美波「出る時にも言いましたけど、この旅行で、お兄さんの疲れをとってもらおうと色々準備してきたんです」

美波「わたし、疲れてるお兄さんの心も体もいーっぱい癒やしてあげたくて……」

美波「日頃の疲れなんてなくなるぐらい完璧に、ですっ」

美波「だから……っ！　この肩も……！　よいしょ。んしょ……んしょ……。しっかりほぐしてあげますから！」

美波「どうです……？　気持ちいいですか？　わたしの力じゃ弱いかもしれませんが……」

主人公（すごく気持ちいいよ）

美波「えへへ……。よかったぁ。じゃあこのまま続けますね！」

美波「もっと強くしてほしいとか、痛いから弱くとかあったら、遠慮なく言ってくださいね」

主人公（うん。ありがとう）

美波「わたしの握力がなくなるぐらい思いっきりやりますから！　うんしょっと」

主人公（それはそうなる前にちゃんと言ってね！）

美波「大丈夫です。お兄さんの疲れを癒やすためですからっ！」

美波「ん……しょ。よいしょ……うんっ、ふんっ！」

美波「（力んだ感じに）どうですかー！　もっとガッツリモミモミしましょうか？」

主人公（大丈夫だよ）

美波「それにしても……。手強いですね」

美波「でも、いきなり強くし過ぎても揉み返しとか、かえってよくないって言いますし」

美波「時間もありますし、ここはじっくりいきましょう。にしても、この肩……ぐぬっ、んぬぬぬっ！」

主人公（が、頑張り過ぎだよ）

＝しばらく肩揉み

＝時間経過

＝肩揉み終わり

美波「ふぅ～……。まだまだ凝ってますが、最初よりはだいぶほぐれましたねっ」

主人公（すごく気持ちよかったよ）

美波「少しは楽になったみたいで、よかったです」

美波「後はお風呂出てからにしましょうね」

美波「肩が凝ってるとしんどいって、お母さんもよく言うんですよね……」

美波「お兄さん、お母さん以上に肩ガッチガチでしたよ……。どうやったらこんなに硬くなるんですか？」

美波「もう、お兄さんの肩が完全にほぐれるまで揉んでたら、きっとわたしの腕がパンパンになっちゃいます……」

美波「（気づき）そしたら、今度はわたしがお兄さんにマッサージしてもらわないとですね」

主人公（あはは、ごめんね、すごく気持ちよかったよ）

美波「いえいえ、わたしがしたくてしてるからいいんです♪」

【1】前に移動

美波「あ、ちょっと肩回してみてください」

美波「マッサージする前より、回るかな……」

//SE：腕を回す音

主人公（あーすごく軽くなった）

美波「あー、よかったぁ。思ったよりちゃんとマッサージ出来てたみたいですね」

美波「お兄さんこりすぎて、わたしの力で大丈夫か不安だったんですよー」

美波「さてと……ふふっ。肩揉みはこのぐらいで終わりますが、まだまだお兄さんを癒やす計画はたくさんありますからね」

美波「今から楽しみにしててくださいね？　ふふっ」

主人公（う、うん……）

美波「あっ、そうだ。忘れないうちに、さっき窓から見えた足湯にも行ってみましょう」

主人公（そうだね。行こう）

美波「足湯に浸かりながら眺める景色……。ふふ♪楽しみです」

美波「それじゃあ、ほら、お兄さん！　早く行きましょー！」

○トラック３
■足湯施設

//SE：二人で歩く足音

【３】

美波「わぁ♪　お兄さん！　足湯です、わたし、ホンモノは初めて見ました！」

美波「今、誰もいませんし、貸し切り状態です！　タイミングもバッチリですね」

主人公（ほんとだ）

美波「これならたっぷりゆっくり楽しめそうですね」

美波「わぁ……ほら、見てください。日本庭園もすごく綺麗ですよ……」

美波「こういうの詳しくないですけど、すごく作り込んでるのはわかります。見惚れちゃいますね」

//SE：せせらぎや鹿踊の音

美波「こういうところの音も……すごくいいですね。なんだか、目をつむってじーっと聞いてたいぐらいです」

主人公（足湯に浸かりながらいっぱい聞こう）

美波「この環境で足湯に入れるなんて、すっごく贅沢ですね」

美波「ふふっ。これでお兄さんとふたりきりなら、わたし、ずーっと足湯に浸かっていられる自信ありますよ」

主人公（そうだね、たっぷり入ろう）

美波「足がふやけるまで楽しんじゃいましょう」

主人公（それはやりすぎだよ）

美波「ふふ、たとえ話ですよ」

美波「さ、お兄さん。誰も居ないうちに入りましょ」

//SE：内履きを脱ぐ音

//SE：足湯に入る音

【3】座る

美波「あぁ～……。温かいですね。すごく気持ちいい……」

美波「ふぅ……」

美波「熱すぎず、ぬるくもなく、丁度いい湯加減です……」

美波「なんだか、体の力が抜けるような感じがします」

主人公（リラックスしてる証拠だね）

美波「足湯でこんなに気持ちいいなんて……。もしかしたらわたし、全身の温泉に入ったら、溶けちゃうかもしれません……」

主人公（いやいや、それはないでしょ）

美波「（いたずらっぽく）冗談ですよ～」

美波「あー、でもわたし、温泉よりもこの足湯の方がいいかもしれません……」

主人公（そう？）

美波「だって、温泉はお兄さんと一緒には入れないじゃないですか……」

主人公（そりゃそうだよ）

美波「ここの旅館、混浴じゃないですからね」

美波「あ……お兄さん、今、ちょっと残念って顔しました？　ふふっ」

美波「でも……実はわたしも、ちょっと憧れみたいなのがあったんですよ」

主人公（憧れってどんな？）

美波「お背中流します。みたいなシーン。ほら、ドラマとかでもあるじゃないですか。だから、お兄さんにそれ言って、実際にお兄さんの背中洗いたかったなぁ」

美波「……まぁ、現実的ではないのはわかってるんですけどね。ふふっ、だからあくまで妄想ってことで」

美波「だから温泉に一緒に入るのは諦めてたんです。でも、こうやって足湯だと一緒に入れるわけですから。わたしは十分嬉しいです」

美波「それに服を脱がなくていいってのもポイント高いですね。色々お兄さんに見られる心配ありませんから」

主人公（……）

美波「……んー。お兄さん今、変なこと考えてませんか？」

主人公（か、考えてないよ！）

美波「あはは。なに慌ててるんですか。もー、ダメですよ。まったく」

美波「やっぱり、背中を流すのは……もっともっと仲良くなってからですね。ふふっ♪」

主人公（からかうなよー）

美波「お兄さんが変なこと考えるのが悪いんです♪」

//SE：小雨が屋根に降ってくる音（軽く）

美波「……あ（軽く気づき）」

美波「あれ？……もしかして、雨？」

//SE:パラパラと屋根に雨粒が当たる音（少しハッキリと）

美波「降ってきちゃいましたね……」

美波「さっきまで晴れてたのに……。山の天気は変わりやすいって本当なんですねー」

美波「このまま、雨が止むまで足湯に入ってましょう。ここ、屋根ありますし。今、旅館に戻ると濡れちゃいますから」

//時間経過

美波「（うつらうつらしながら）……んっ、……んっ」

主人公（大丈夫？）

美波「――っ！　す、すみません、うとうとしちゃってました」

美波「うー……。わたしも電車で少し疲れちゃってたのかもしれません」

主人公（部屋に戻る？）

美波「うーん。まだ小雨降ってますし、もう少しこ

こで雨宿りしましょう」

美波「でも……（欠伸）わたしまた寝ちゃいそうなので……その……肩、貸してくれませんか？」

主人公（肩……？）

美波「雨が上がるまでの少しの間だけでいいですから……」

美波「そうしないと、わたし……足湯に落っこちちゃうかもしれませんよー」

美波「お兄さんにくっついてたら、それだけで安心するので……」

主人公（う、うん。いいよ）

美波「ふふ。ありがとうございます」

//SE：肩に頭をのせる音

【3】肩に頭をのせて小さい声で

美波「えへへ。嬉しいなぁ……」

美波「……このまま、ずーっと雨止まなくてもいいなぁー……なーんて、考えちゃいます」

主人公（そ、それはこまるよ）

美波「ふふっ。冗談ですよー。ちゃんと部屋に戻らないと、お兄さんを癒やそう計画も実行出来ませんからねー」

主人公（それより、眠いんじゃなかったの？）

美波「ん……？　眠いですよ。でも、せっかくお兄さんとくっついてるのに、寝るのはもったいないなーって思ってるのもあります……」

美波「だから……寝ないようにこうやって話しかけてるんじゃないですか」

美波「お兄さんと話してたら、楽しくてこのまま起きてられるかなーって」

主人公（そ、そうかな）

美波「足も気持ちいいし、雨の音も心地良いし……。お兄さんとはくっついてるし……わたし、今が一番幸せかも……」

主人公（何言ってるんだよ）

美波「お兄さんは、リラックスできてないですか？」

主人公（……できてるよ）

美波「よかったぁ……リラックスしてるのがわたしだけだったら、なんだか気が引けちゃいますから」

美波「ね……お兄さん。やっぱり最近、お仕事忙しいんですか？」

主人公（まぁ、忙しいね）

美波「頑張るのはお兄さんの素敵なところだからいいですけど……ムリしちゃダメなんですからね」

美波「……わたし、心配しちゃいますから」

美波「疲れすぎて倒れたり、なんて。絶対イヤですからね」

美波「なので、無理しない程度に頑張ってください」

美波「多分ですけど……今のお兄さんは頑張りすぎなんだと思います」

主人公（ごめん）

美波「……わたしに謝っても意味ないですからねー。自分の体に謝ってください」

美波「ふふふっ」

美波「（つぶやくように）……でも、そこまでなる前に、意地でもわたしがお兄さんを癒やしますけど」

主人公（えっ？）

美波「なんでもないですよー」

//小雨が止む

美波「……雨やんできましたね」

美波「うーんっ！（伸び）」

美波「もうちょっとくっついてたいですけど、今のうちに部屋に戻ったほうがよさそうですね」

美波「またいつ降り出すかわかりませんし」

主人公（そうだね）

//SE：足湯から上がる音（水音）

【1】

美波「（背伸び）くぅーっ！　はぁぁ。足湯、すっごく気持ちよかったですね♪」

美波「あと、肩……ありがとうございました」

美波「足湯から上がったら、目が冷めました！」

美波「お兄さんとまったりトーク、楽しかったですよ」

美波「……でも、今思うと、ちょっと恥ずかしいこ

とも言っちゃったかも」

美波「……まぁ、本心だからいいんですけどね♪」

美波「わたしは、お兄さんのこと、大切に思ってますから。なんちゃって、ふふっ」

美波「ほら、早く部屋に戻りましょー！」

美波「温泉にも入りましょうね、あとご飯もきっと美味しいし、楽しみだな～♪」

○トラック４
■旅館の部屋

【1】
美波「それじゃ、お兄さん。温泉行きましょうか」

美波「夕食はお部屋に持ってきてくれるみたいなので、それまでに戻って来る感じですね」

美波「もう、あまり時間ないので、軽く入る感じですけど……」

美波「後でまたゆっくり入ってもいいかもですね」

美波「あっ、というか部屋でこうやってもたもたしてたら時間がもったいないですね！」

主人公（そうだね。すぐ行こう）

美波「はい、それでは出たらそのままお部屋に戻る感じで」

//時間経過
//入浴後、旅館の部屋（ふたりとも浴衣）

//SE：ふすまが閉まる音

【9】机を挟んで向かい合って座っている

美波「うわぁー♪　お料理すごい豪華ですね！」

美波「鮎の塩焼きに……夏野菜もたっぷりっ！」

美波「どれも美味しそうですねー！」

主人公（うん。早速食べようか）

美波「これも写真撮っておかないと」

//SE:スマホのカメラのシャッター音

美波「あ、でも……」

主人公（どうした？）

美波「これだと机越しに向かい合って座る形じゃないですか」

主人公（うん。そうだね）

美波「うぅ、この席の並びだとお兄さんが遠いです！」

美波「あの、隣で食べてもいいですか……？」

主人公（いいよ）

美波「やったぁ！　じゃあ、そっちに行きまーす」

//SE：隣へ配膳等移動させる音

【7】

美波「えへへ♪　わがままを聞いてくれてありがとうございます」

美波「それじゃ、いただきましょう♪」

美波「いただきま～す」

主人公（いただきます）

//SE：咀嚼音

美波「んーっ！　美味しいっ♪　すごく美味しいですよお兄さんっ！」

主人公（ほんとだね）

美波「野菜って、こんなに美味しかったんだ……」

美波「同じ野菜でも、普段食べてるのと全然違いますっ！」

美波「あぁ……。わたしなんだかすごく感動してますっ！」

美波「これは、お母さんにも食べさせてあげたかったな……」

//SE：咀嚼音

美波「うん、うんっ！　野菜のおひたしも、天ぷらも、和え物も全部美味しいっ！」

美波「あ、鮎の塩焼きも食べてみます――！」

//SE：咀嚼音（鮎の塩焼き）

美波「んん――っ！！」

美波「あぁ……何これ……」

美波「美味しい……美味しすぎます……」

美波「ふうわりして柔らかいのに、しっかりと身が引き締まってる……塩加減も抜群ですね……」

美波「（震え声で）これが……旅館のお料理――っ！」

主人公（たしかに、感動する美味しさだね）

美波「ね、美味しいですよね！」

美波「あっ……。ちなみになんですけど」

主人公（どうした？）

美波「お兄さんは、このなかでどれが一番好きですか？」

主人公（うーん。鮎の塩焼きかな）

美波「鮎の塩焼き……。やっぱりそうですか……。めちゃくちゃ美味しいですもんね……」

美波「（わざとらしく）あーでも、全部美味しすぎてわたしは選べないかもしれません」

美波「それでは、ご希望の鮎の塩焼きです。はい。あーん♪」

主人公（えぇっ！！）

美波「え、ちょ、ちょっと……。お兄さん逃げないでくださいよ……」

美波「わたしが恥ずかしくなっちゃうじゃないですか……」

美波「う……。もしかして。わたしのあーん。やっぱり嫌でしたか……？」

主人公（嫌とかじゃなくて……びっくりしたというか）

美波「嫌じゃないなら……食べて……欲しいな」

美波「わ、わたしも、思い切ってやってみたので……この努力に報いると思って！」

美波「(少しわざとらしく)あぁっ、も、もう。絶対今わたしの顔赤いじゃないですかっ」

美波「(いたずらっぽく)お兄さんが、あーんで食べてくれないからですよー」

美波「……別に変な意味でしたわけじゃないんです」

美波「わたし、お兄さんに日頃お世話になってますから、そのお礼に少しでも楽しんで欲しくて……。それに、これでも疲れが取れたりするのかもって思ったんですよ」

美波「(わざとらしく)あー……。でもお兄さんはわたしからの、あーんを受け入れてくれなかった……。うう、悲しいなぁ……(わざとらしく)」

主人公(う……。わ、わかったよ)

美波「えっ、食べてくれるんですか!」

主人公(食べるよ……)

美波「やった……! やっぱり優しい!」

美波「はい、じゃあ、お口開けてくださいね♪」

美波「ふふ♪ 鮎の塩焼きですよー。あ〜ん♪」

//SE:パクと食べる音

美波「へへ♪ これ、なんだか良いですね! 楽しいです!」

主人公(そ、そう……?)

美波「まだまだ他のお料理もありますからね〜。どんどん食べてくださいっ!」

美波「はい、またいきますよー。あ〜ん♪」

//SE：パクと食べる音

美波「ふふ♪　しっかり噛んで食べてくださいねぇ～♪」

美波「はい、もうひとつ。あ～ん♪」

//SE：パクと食べる音

美波「お兄さん上手ですねぇ～♪　しっかりあむあむ噛んで食べてくださいねぇ～♪」

主人公（それじゃ、赤ちゃんみたいじゃないか）

美波「えへへ。調子に乗っちゃいました！　でも、あ～んしてもらうのすごく楽しくて……」

美波「なんだか食べてもらえるのが嬉しくなってきたんですよねぇ」

美波「……だから、遠慮せずにもっと食べてください」

美波「はい。お兄さん♪　あ～ん♪」

//SE：パクと食べる音

美波「～～♪（少し鼻歌）お兄さん、すごく素直にあーんで食べてくれる……♪」

美波「んふ♪　なんだかとっても良いですねこれ」

美波「食べてくれるのも、もちろん嬉しいんですけど……。なんだかカップルみたいだなって♪」

主人公（茶化しちゃダメでしょ）

美波「茶化してるわけじゃないですよ。本当にそう思って、楽しいんです！」

美波「もっとお兄さんに食べさせてあげたいなぁ。ってなるんですよ。ふふふ♪」

美波「って、あれ……。もう鮎、無くなっちゃってる……」

美波「えー……。もしかして、もう全部食べさせちゃった。ってことですか……」

主人公（そう……だね）

美波「あぁ……。すごく楽しかったのに。もうおしまい……」

美波「はぁ～……（深いため息）」

主人公（お、俺も食べさせてもらって楽しかったし。また今度……食べさせてもらうからさ！）

美波「う～……。まぁ、もう無いものはしょうがないですね」

美波「お兄さんも楽しかったみたいですし……」

美波「また今度もっと、もーっとしてあげるってことで手を打ちますね！」

美波「そうだ、ケーキとかパフェとか、甘いものとかだとすごくカップルみたいですよね」

美波「うんうん。そういうのでするのいいかもです」

主人公（いや、確かにカップルっぽいけど……）

美波「まぁ、それはまたの機会のお楽しみです」

美波「……それはそうと、残りのご飯早く食べましょうか。せっかくですから冷める前に」

主人公（そうだね）

美波「食後はまた別のお楽しみがありますから。ふふふっ（悪戯っぽく）」

主人公（え、まだなにかあるの？）

美波「この後はですねー、お兄さんを癒やすための特別コースが待ってます」

美波「ふふ。そりゃもう、お兄さんの疲れが飛んでいっちゃうようなすごいことをしてあげますから」

美波「（すごく楽しそうに）どんなことかは、その時のお楽しみです」

主人公（えぇ……）

美波「（いたずらっぽく）お兄さん♪　覚悟しててくださいね……♪」

○トラック５

■旅館の部屋

※プロットで右耳、左耳の表記が混雑していたのでこちらでは左耳、トラック６では右耳という形にしています。

【３】座ってる状態

美波「あぁ～……。料理、美味しかったですねぇ」

美波「毎日でも食べたいぐらいでしたね」

主人公（確かに。毎日食べれたらいいよね）

美波「わたし、厨房に習いにいこうかなー。なんてちょっと考えちゃいました」

主人公（えぇっ！　そこまで！？）

美波「だって、自分で作れたら毎日食べれるじゃないですか」

美波「そ、それに……。あれぐらい料理作るのうまくなったら。お兄さんにごちそうして、笑顔で美味しいって言ってもらえるなぁ。なんて……」

美波「でも、ちょっと習っただけで作れるようになるほど料理は甘くないですよねー」

主人公（そうだね）

美波「（小声で）コツでもわかればなぁー……」

美波「しょうがないから、自力でなんとかあの味を再現出来るよう頑張ってみます」

主人公（どうしてもあの味がいいの？）

美波「……だって、お兄さんがすごく美味しそうに食べてたんですもん」

美波「ってことは、料理でもお兄さんを癒やすことが出来るじゃないですか」

美波「あ……そうだ、今はそれよりも……」

//SE：立ち上がる音

【3】座る→立つ

美波「よいしょっと」

//SE：窓の方へと歩く足音

//SE：窓を開ける音

【10】

美波「ん～……♪　やっぱり外の空気、気持ちいいですねぇー」

美波「風が涼しいですよー」

美波「雨もすっかり上がって、晴れてるみたいですし」

//SE：虫の鳴き声

美波「あ……。虫の声も」

美波「（耳を澄ましながら）……いい音ですね」

//SE：風鈴の音

美波「風鈴もいいですね……日本の夏って感じ」

美波「ふふ♪　ここは夏の良いところが全部つまってますねぇ」

美波「しばらく窓、開けておきましょうか」

美波「夏の風情を十分満喫できると思いますよ」

主人公（そうだね。まったりしよう）

美波「（何かを企んでるように笑みを浮かべながら）……ふふ♪　これは最高のシチュエーションです」

主人公（最高のシチュエーション？）

美波「もちろん、お兄さんを癒やすための状況っていう意味ですよー。ふふっ」

主人公（何を企んでるの……？）

美波「別に変なことはしないから、安心してくださいね」

//SE：美波が自分のリュックのところへ歩く足音

//SE：リュックを開けて、中を漁る音

【１２】

美波「えーっと、この辺に入れてたはず……」

美波「あっ、あったあった！」

//SE：美波が後ろを通って隣へ歩いてくる音

【７】

美波「じゃじゃーん♪」

主人公（それはなに……？）

美波「お兄さん癒やしセットその１！　耳かきセット～」

主人公（み、耳かき！？）

美波「この前してあげたとき、すっごく気持ちよさそうにしてたじゃないですか」

美波「あの時のお兄さん、可愛かったな……（小声）」

美波「しかも、ここは温泉旅館で、わたしたちは今浴衣姿です……」

主人公（うん、そうだね……）

美波「（悪戯っぽく）浴衣って、普通の服よりも、薄くて肌を感じやすいと思いませんか……？」

主人公（た、確かに）

美波「そして！　耳かきといえば膝枕です」

美波「浴衣を着た状態の膝枕……。ふふ♪　想像してみてください」

主人公（……ゴク）

【7】耳元で囁く
美波「普段の服よりも、肌触りとぬくもりが頭で感じることができちゃうんですよー」
美波「し、か、も……。もしはだけちゃったりしたら……」
//エロいのNGならカットで
主人公（したら……？）
美波「クスッ♪　ここから先はわたしの口からは言えないです。お兄さんのご想像におまかせしますね♪」
主人公（……危険だ。耳かきは危険だよ！）
【7】普通に会話
美波「あ、お兄さん。逃げちゃダメですよ？」
美波「だって、これはお兄さんを癒やすためにやることなんですから」
美波「ほら、覚悟を決めて寝てください！」
主人公（わ、わかったよ……）
//SE：膝枕に寝転がる音
【7】耳元で囁き
美波「クスッ♪　お兄さん素直ですねー♪　嬉しいです」
美波「それじゃ、耳かきしていきますね……」
美波「でもー。その前に……」
主人公（え、なにまだなにかあるの？）

美波「私も色々勉強してきたんですよ」

美波「まずは、耳の外側からマッサージです♪」

美波「いきなり耳のなかを始めるより、緊張がほぐれるらしいです」

美波「ほら、耳かきされるのってなんだか力入っちゃうじゃないですか」

主人公（確かに肩とか体に力入るかも）

美波「力入れられると、やりにくいですし。危ないので、軽くマッサージから入ってリラックスしてもらいます♪」

//SE：耳の外側をマッサージ（左耳）

美波「まずは、指でかるぅーく耳をなぞってぇー……」

主人公（おお……）

美波「ふふ♪　わたしの指の感触味わってくださいねー」

美波「耳って、結構敏感だったりしますから。かるーくかるーくなぞりますからね……♪」

美波「……ふふ♪　お兄さんなんだか気持ちよさそうです♪」

美波「知ってますか？　耳って意外と神経が集まってて、疲れると凝ったりしちゃうんですよ」

美波「だから、耳をマッサージするのってすごく良いらしいんです」

美波「ふふ♪　耳のマッサージとか、耳かきがリラックス効果があるの、納得しちゃいますよね♪」

//しばらくさわさわ

美波「はい、指でのマッサージは終わりです」

美波「次は、耳かきで外側マッサージしますね」

//SE：耳かきで耳の外側をなぞる音

美波「……ふふ♪　指とは違った感覚ですよね」

美波「優しく耳かきでなぞられると気持ちいいですよねー♪」

美波「わたし、お兄さんにこれをするために、自分で結構練習したんですよ？」

美波「だから……。わたしが気持ちいいなーって思った感覚を今お兄さんに味わってもらってるんです♪」

美波「これが気持ちいいって思ってくれてるのなら……。わたしとお兄さんの気持ちいいって思う感覚が同じってことです……。ふふ♪」

美波「なんだか焦らされてるような感じしちゃいますよねー？」

主人公（う、うん……早く耳のなかしてほしい……かも）

美波「ふふっ。もー。早くなかにして欲しいんですかー？　しょうがないお兄さんですねー……」

美波「それじゃあ、耳のなかに入れて……。耳かきしちゃいますね♪」

主人公（うん……お願いします）

//SE：耳かきの音（左耳）

美波「ゆーっくり、ゆっくり入れていきますからねぇー……」

美波「おぉ、お兄さんの耳の中が丸見えです♪」

美波「明かりのせいか、この前よりハッキリ見えちゃいます……お兄さんのお耳の中ってこんな感じなんですねぇ」

主人公（ちょっと、恥ずかしいよ……）

美波「ふふ、すみません。ちゃんと耳かきします♪」

美波「ほら……カリカリ……カリカリ……」

美波「気持ちいいですかぁー？」

主人公（うん、気持ちいいよ）

美波「ふふ♪　耳かきって感触ももちろんですけど、音も心地良いですよねぇー」

美波「……前の時は、わたしもちょっと緊張しちゃって。でも、今回は大丈夫です」

美波「お兄さんも……。前より力抜けてる感じしますね」

主人公（うん、そうかも）

美波「クスクス♪　お兄さんの反応かわいいです♪」

美波「……いいんですよ。わたしの膝枕の感触も、しっかり堪能してくださいね」

美波「だって、膝枕も耳かきも、お兄さんを癒やすためにしてるんですから……」

美波「わたしの太ももでお兄さんが癒やされるのな

ら、わたしも嬉しいです♪」

主人公（そ、そうなの……？　じゃあ……）

美波「あっ、でも、手で触ったり、撫でたりするのはダメですよー？」

美波「耳かきの最中なんですから、わたしがびっくりしちゃったら危ないですからね♪」

主人公（あ、うん……そうだね）

美波「あー……。もしかしてお兄さん。わたしの太もも触ろうと思ってたんですかー？」

美波「いけないお兄さんですねー。ダメですよ。お母さんに言いつけちゃいますからね？」

美波「ふふ……♪　でも、なんだかちょっと安心しました」

主人公（え？　なにが……？）

美波「お兄さん的に触りたいって思うってことは、わたしの太ももが魅力的だってことじゃないですか」

美波「全然興味なかったらどうしようかなって思ってたぐらいなので♪」

主人公（そ、そういうものなのかな）

美波「（いたずらっぽく）もちろん……お兄さんにだけ思うことなんですよー。ふふ♪」

美波「ふぅ……なんだか耳かきしながら話すのって良いですね」

美波「声色とかでお兄さんが気持ちよさそうとかわかりますし、我慢してるのとかもわかって……。楽しいです♪」

主人公（からかってるの……？）

美波「わたしは真剣ですよー。お兄さんを癒やすことに大真面目です♪」

美波「耳かきも……ちゃーんと進んでますよ」

美波「お兄さんの耳の中、ちゃんと、どんどん綺麗になってます」

美波「……綺麗になっていくのはいいんですが。少し寂しいですね」

美波「だって……そうしたら、この楽しい時間が終わっちゃうじゃないですか」

主人公（反対の耳もあるでしょ）

美波「反対の耳もありますけどぉ……。もっとじっくり堪能したいなー。って気持ちもあるんです」

美波「ほら、もうすぐ終わっちゃいます。ふふっ。でも、すっごく綺麗に掃除できちゃいました」

主人公（いいことだよ）

美波「最後にっと」

美波「ふーーーーっ……（息吹きかける）」

主人公（わぁっ！）

美波「ふふふっ。お兄さんびっくりしすぎですよ」

主人公（だって、いきなりだったから）

美波「反応、すごくよかったですねぇ♪」

美波「そうそう、前の時もでした。これされるの、

好きでしたよね♪　んふふ♪」

美波「ふー……♪　ふぅ～……♪」

〝何度か息吹き掛ける

主人公（あぁぁ……）

美波「あっ、動いちゃダメですよー。ちゃーんとじーっとしてくださいねー」

美波「ふー……♪　ふぅぅ～……♪　んふ♪　もじもじもしちゃダメなんですから……」

美波「ふー……。ふぅー……。まだまだしますから、ちゃーんと我慢するんですよー」

美波「ふー……ふー……。んふ♪　ふぅぅ～……。ふっ♪」

美波「あはは……。お兄さんの反応……かわいいです♪」

主人公（からかわないでよ……）

美波「だってぇ……。楽しくなってきたんですもん」

美波「ふっ♪　ふぅ～♪　ふふふ♪　我慢できてえらいですねぇ♪　その調子ですよー」

美波「ふぅ～……。ふぅ～……。お耳でしっかりわたしの息……。感じてくださいね♪」

美波「ふぅー♪　ん、ふぅ～……。はぁ～♪」

美波「（いたずらっぽく）もっと、吐息みたいにしたほうがいいですかねぇー？」

主人公（そ、それはやばいって）

美波「ふふ♪　お兄さん、ちゃーんと耐えてくださいよ♪」

美波「はぁ……。はぁぁ～んっ、はぁ～……。ふぅ♪」

主人公（ダメだってぇ）

美波「んふふ♪　モジモジしながら、ちゃーんとわたしの吐息を耳で受けてるお兄さんかわいいです♪」

美波「ダメって言いつつ、ちゃーんと楽しんでるじゃないですかぁ♪」

美波「ほら、まだまだいきますよー」

美波「はぁ♪　はふっ、ふぅ～……はぁ♪　んふ♪」

美波「はぁ～……♪　はぁ、はふぅ～♪　ふー♪　ふ～……♪」

美波「んっ、はぁ♪　わたしの息で癒やされてるんですね……♪　嬉しいです……ふぅ～♪」

美波「もっと……んっ、はぁ～……。もーっと癒やされてくださいねー。ふぅ～……ふー♪」

美波「んっ、はぁ……はぁ……♪　お兄さんの反応見てたら……。すごく楽しくなって……んふー♪」

美波「ふぅ～……ふぅぅ～♪　ずーっとこれしてたいくらいです……♪　はぁ♪」

美波「クスッ♪　でも、ずーっとやってたら反対のお耳掃除が出来ないですねー」

主人公（あぁぁっ！　確かにっ！　反対の耳を耳かきしてっ！）

美波「あはは♪　そんなに慌てなくていいですよー」

美波「わたし、正直で素直なお兄さん素敵だと思いますから……」

美波「はい。反対向いてください」

美波「次はこっちのお耳を掃除しますね♪」

○トラック6

■旅館の部屋

//SE：もぞもぞと膝枕に頭をのせる音

【3】膝枕の状態

美波「はーい。じゃあ、こっちのお耳もしっかり癒やしていきますね♪」

美波「まずは、さっきと同じように、お耳の外側のマッサージからです！」

美波「こっちもちゃーんと気持ちよくしますからねぇ♪」

//SE：指で耳の外側をマッサージする音

美波「ん～……。こっちの耳も、なんだか凝ってますねぇー」

美波「耳なのになんだか硬いです……」

美波「むぅ、本当に、お兄さん疲れを溜めすぎですよー」

美波「まったく……。わたしが、しっかり癒やしてあげないと大変なことになりますね」

主人公（うー。じゃあお願いするよ）

美波「クスッ♪ じゃあ、しっかり、してあげます

ね」

美波「ほら、ぐりぐりー……ぐりぐりー……って耳の周り触るの。気持ちいいでしょ」

主人公（……うん）

美波「ふふ♪　外側、しっかり柔らかくほぐしてからしてから耳かきしてあげますからねー」

美波「だからちゃーんと、大人しくしててくださいね♪」

主人公（お願いします……）

美波「ふふ……♪　そう、そのままジーッと動かないでくださいよ～」

美波「ほーら。さわさわ……さわさわぁ……」

美波「さわさわぁ～……クスッ♪　さすさすって撫でてるだけなのに、お兄さん気持ちよさそう♪」

美波「わたしの指、そんなに心地良いんですね♪」

主人公（……うん。気持ちいいよ）

美波「……嬉しいです」

美波「また、いつでも言ってくださいね。わたし、喜んでお兄さんを癒やしますから……」

主人公（……）

美波「ふふ♪　あれぇ。もしかして恥ずかしがってるんですかぁ」

美波「もー……わたしに遠慮なんてしなくていいんですからね♪」

主人公（遠慮してるわけじゃ……）

美波「ふふ。どんどん甘えてくださいね。わたしがちゃーんと受け止めてあげますから」

美波「さすさす……さすさす……って。お耳を撫でるぐらい、いつでもしますよ♪」

美波「……クスッ。ちゃんと力を抜いてお耳擦られてるの偉いですね♪」

美波「お兄さんがジッとしてくれてるから、わたしも安心してマッサージ出来ます」

//しばらく耳をマッサージする音

美波「……よし！　うん。外側はだいぶほぐれてきたかなぁ」

主人公（うん、なんだか楽になってる気がする）

美波「まだまだ、指でマッサージするのが終わっただけですからねぇ」

美波「（小声）次は耳かきで……」

美波「それじゃ、続けますね♪」

//SE：耳かきで耳の外側をなぞる音

美波「こしょこしょー……♪　ふふ、ゆーっくりじっくりなぞるのも気持ちいいでしょー♪」

美波「指よりも、細かくあたってススーってなぞられるわけですからねー。くすぐったいのと気持ちいいのと混ざってる感じしますよね♪」

主人公（うん。こっちの耳でも気持ちいい）

美波「（小声）これがまた、焦らすみたいでいいんで

すよねぇー♪」

主人公（えっ、焦らし……？）

美波「あぁ、いえいえ。なんでもありません。お兄さんは気にしないでくださいね♪」

主人公（気になるよ……）

美波「ふふ♪　お兄さん♪　今の世の中、鈍感力っていうのも大事らしいですよー」

美波「ほら、よく推理ドラマでも察しがいい人はすぐ犯人の餌食に――」

主人公（えっ！　俺消されるの！？）

美波「ふふっ、冗談ですよー。犯人でもないのにわたしがお兄さんを餌食にするわけないじゃないですか」

美波「……でも、女心を察して気づかないふりをするのも良い男の条件ですからね」

美波「なーんて。お兄さんは十分素敵な人なんですけどね……」

主人公（……）

美波「あ、でも気づかなすぎるのもよくないから気をつけてくださいね♪」

主人公（どうしろっていうんだよ！）

美波「ほら、女心と秋の空っていうじゃないですか。女心っていうのはそれだけ繊細ってことです」

主人公（そ、そうなんだ……）

美波「ちなみに、今はー……。お兄さんにわたしの

声と耳の感触を、たっぷり味わって欲しいなって思ってます！」

主人公（わ、わかったよ）

美波「ふふ♪　スリスリ……スリスリ……って耳かきでいーっぱい擦ってあげますから♪」

//しばらく耳かきで外側をこする

美波「……うん、外側はこのぐらいでいいですね」

美波「それじゃあ……お耳の中掃除しますね♪」

美波「動いちゃダメですからねぇー♪」

主人公（うん、動かないよ）

美波「ふふ♪　ちゃんとジッとしててくださいよ」

//SE：耳かきの音

美波「カリカリ……カリカリ……♪　ふふ♪　こっちの耳も、耳かきで気持ちよくなってくださいね」

美波「どっちのお耳も、完璧に綺麗にしてあげますから♪」

主人公（ありがとう）

美波「ふふ♪　お兄さんが自分で耳かきしなくていいぐらい徹底的にやってあげますよ」

主人公（そ、そんなに……？）

美波「わたしが耳かきするんですから当然です」

美波「それで、耳掃除が必要になった時は、またわたしがしてあげますから」

美波「（小声でいたずらっぽく）お兄さんの大好きなわたしの太ももに頭をのせて……ね♪」

主人公（――っ！）

美波「わっ！　もう、お兄さん！　動いちゃダメです」

美波「もー……。びっくりしたじゃないですか。ダメですよ！　本当に危ないんですからね」

主人公（ご、ごめん……）

美波「もし、なにかあったら痛い思いしちゃうのはお兄さんなんですよ！」

主人公（だって、変なこと言うから……）

美波「言っておきますけど、わたしは変なことなんて言ってないですからねー。お兄さんが勝手にびっくりして動いたんです」

主人公（えぇ……）

美波「だって、お兄さん……わたしの膝枕で太ももに頭をのせてるとすごくニコニコになるじゃないですか」

主人公（それは、そうだけどさ）

美波「ってことは、わたしの太ももが好きだからじゃないんですかー？」

主人公（うぅ……）

美波「（いたずらっぽく）……ふふ♪」

美波「だから、わたしは本当のことを言っただけですよーだ」

主人公（わかったよ……。俺が悪かった）

美波「ふふっ♪　はい。もういいからじっとしててくださいねー♪」

美波「大丈夫です。もういたずらしませんから。安心してください」

主人公（ホントかな）

美波「あともう少しで終わりですよ」

主人公（そっか）

美波「……本当はさっき言ったようにずーっと耳かきしてあげたいのはあるんですけど。まだ他にも、お兄さんを癒やそう計画は色々ありますからね」

美波「時間が無限にあればいいんですけどね……」

美波「せっかく色々用意したので、全部堪能してもらいたいんです」

主人公（お手柔らかに頼むよ……）

美波「ふふ♪　だからまずはこの耳かきを味わってくださいね♪」

美波「ほら、カリカリ……カリカリ……って音に集中してください……」

〃しばらく耳かきの音

〃時間経過

美波「……うん。お耳すごくきれいになりましたよ！」

主人公（ありがとう！）

美波「本当にもうすっごく奥まで見えちゃうぐらい綺麗ですよ～！」

美波「(小声でつぶやくように) これなら鼓膜までわたしの息が届いちゃいそうですねぇー……」

主人公（え、またなにか言わなかった！？）

美波「ほーら、お兄さん♪　耳かきの後は――ふふ♪　わかってますよねぇ？」

主人公（……？）

美波「お兄さんのだーいすきなやつをしてあげますよ……♪」

//SE：耳に息を吹きかける音

美波「ふぅ～……ふぅ～……♪　ふふっ。ほら、お兄さん。動いちゃダメですよ、じっとしててください」

主人公（だって、いきなりだったから……）

美波「反対の耳でもしたじゃないですかぁ♪　だから当然こっちの耳にもするに決まってますよ。ふふ♪」

美波「はぁ～……♪　ふっ、んふぅ～……♪　鼓膜にわたしの息がかかるのちゃーんと感じてくださいね……♪」

主人公（……ほんとに奥まで……ぁぁ）

美波「ふー……。はふぅ～……♪　やさしーくたーっぷり息吹きかけてあげますから♪」

美波「はぁ～……。ふっ、ふぅ～……。んふぅ～……♪　そのままお兄さんわたしの吐息全部受け止めてくださいね♪」

主人公（あ、あぁ……）

美波「ふふ……♪　お兄さん。気持ちよさそうですねー。はぁ～……♪　ふぅぅぅ～……」

美波「んっ、ふー……♪　はふぅー♪　お兄さんの顔、どんどん力が抜けてゆるくなってますねぇー♪」

美波「ふー……♪　んふー……♪　えへへ。いい傾向ですねー♪　体がほぐれてる証拠です♪」

美波「はぁぁ～……。ふぅ～……♪　いいですよー。そのままとろとろに蕩けちゃってくださいねぇー」

美波「ん……っ、ふぅ～……♪　はふー……♪　クスッ♪　すごい。お兄さんすごくいい表情してますね。えへへ♪」

主人公（あぁ……だって、気持ちよくて……）

美波「あぁ……。すごく良いです……っ！」

美波「お兄さんがわたしの息でそんな顔してくれるなんて……」

美波「……嬉しいというか、ドキドキ……。とも違う。なんですかねこれ……」

美波「えっと……すごく胸がキュンっ！　ってするんです……。あぁ……。お兄さんのその顔、もっとみたいです……」

美波「うぅ……。なんだかお兄さんがすごく愛おしく見えてきました……♪」

美波「あぁ……。ダメっ！　我慢できないですっ！」

//SE：美波が頭を撫でる音

美波「よしよし……よしよーし♪」

主人公（えっ、なでなで？）

美波「えへへ……。お兄さんを見てたら我慢できなくなっちゃって……」

主人公（それで頭を……？）

美波「あー……。お兄さん♪　すごく可愛いですよ……」

主人公（かわいいって言われても……）

美波「あぁ♪　キュンキュンしちゃって、自然と頭撫でちゃってます……。うぅ……」

美波「お兄さん、なんでこんなにかわいいんですかぁ～……♪　もぅ……！」

美波「よしよし……。ん～……。お兄さん。いいこいいこですよぉ～……♪」

主人公（これじゃ子どもみたいだよ）

美波「あっ、わたしお兄さんを子どもみたいに感じちゃってるのかも……」

美波「なんでしょう……。これが母性本能ってやつなんですかね……。お兄さんナデナデしてると……。すごくほっこりしちゃうんです」

美波「あぁ……高校生のわたしにもちゃんと母性本能というのがあったんですね……！」

美波「ふふふ♪　まさか、お兄さんで認識するとは思いませんでしたが……」

主人公（俺もまさかだよ……）

美波「はぁ……♪　でもかわいく感じちゃうんです……♪　あぁ、よしよし……♪　お兄さん♪　よし

よーし」

美波「お兄さんはいいこですねぇ～♪　よしよし……♪　ふふ♪」

美波「大丈夫ですよー。わたしがお兄さんのそばに居ますからねぇー。安心して安らいでくださいねぇー♪」

主人公（……なんだか本当に子どもになったみたい）

美波「……ふふ♪　お母さんって、こんな感じなんですかね……」

美波「なんだか、お兄さんがすごく愛おしくて、かわいくて……たまらないんですよね……」

主人公（これは、どういう反応したらいいんだ……）

美波「はぁん♪　困ってるお兄さんもかわいいっ♪」

〝しばらく頭を撫でる。

美波「よしよーし……。よしよし♪」

主人公（ま、まだ撫でるの？）

美波「（気づき）あぁ、そろそろ止めないと……」

美波「このままだと永遠にお兄さんの頭を撫で続けてしまいます……」

美波「母性本能って恐ろしいですね……」

主人公（俺も気持ちよくて。自分が子どもなのかと錯覚しそうだったよ）

美波「撫でられるのも良いなんて。お兄さんはほんとかわいいですねぇ♪」

美波「でも、お兄さんがリラックスしすぎて寝ちゃったら他のことが出来ないので。そろそろ止めますね♪」

主人公（他にもまだ癒やし計画があるの？）

美波「ふふ♪　まだまだ気持ちいいこと考えてますよー」

美波「たーくさん。気持ちいいことしましょうね♪」

主人公（お願いします）

美波「えへへ♪　お兄さんが素直で嬉しいです♪」

美波「じゃあ、次のモノを用意しますね」

○トラック７

■旅館の部屋

//SE：ガサゴソとリュックを漁る音

【１０】

美波「えーっと、どこにいれたかなぁ……」

美波「これでもないし……」

美波「あっ、あったっ♪」

//SE：近づいてくる足音

//SE：座る音

【１】

美波「はい！　今度はこれです！」

主人公（これは……何？）

美波「これはですね……マッサージ用のアロマオイ

ルです」

主人公（マッサージをしてくれるってことかな）

美波「ふふふ♪　ただのマッサージじゃないですよー」

美波「このアロマオイルをつかって、耳をマッサージするんです！」

主人公（アロマオイルで耳のマッサージ！？）

美波「ふふ♪　アロマオイルをつけるので、ただ手でマッサージするのと違う感覚になるんですよ」

美波「アロマでリラックス効果のある、いい香りがしますし。オイルで滑りがよくなって、程よい力加減でケアすることができるんです」

美波「……って、このパッケージにも書いてあります！」

主人公（へ、へぇーなるほど）

美波「といっても、わたしもまだ慣れてないんですけどね」

美波「あっ、でも大丈夫ですよ！」

美波「この間、お母さんにしたらすごく気持ちよさそうでしたよ。まさに大好評でした！」

美波「安全性もバッチリってことです！」

主人公（あれ、お母さん実験台になってない？）

美波「いきなりお兄さんに使うのは不安だったんですよね。なのでお母さんで試しちゃいました」

主人公（そ、そっか……）

美波「でも、おかげで力加減とかもわかるようになりました」

美波「だから、お兄さんにもして、癒やされてもらおうかなーって思って持ってきたんです！」

主人公（なるほどね。じゃあお願いしようかな）

美波「ふふ♪　じゃあたっぷりオイルつけてマッサージさせてもらいますね！」

主人公（あれ？　このまま向き合ってするの？）

美波「あ、このまま向き合ってやりますよ♪　後ろからやったら顔が見えないじゃないですか」

主人公（顔見られるのか……。なんだか……恥ずかしいね）

美波「マッサージする時、顔が見えてたほうがやりやすいんですよね。表情で力加減の調整もしやすいですから」

主人公（あ、そういうことか）

美波「……あと、お兄さんの気持ちよくなってる表情とか、恥ずかしがってる表情とか見たいんですもん」

主人公（……）

美波「あっ、いや、ちゃんとできてるか顔を見ながらやったほうがわかりやすいのは本当ですよ！」

主人公（いや、まぁそこはそうだと思うけど）

美波「だから……。このまま向き合った状態でお耳をマッサージします！　いいですね？」

主人公（わ、わかったよ……）

美波「（いたずらっぽく）えへへ♪　それに、お兄さんだって恥ずかしいって言いながら。わたしの顔が見えたほうが嬉しいんじゃないですかー？」

主人公（それは……秘密ってことで）

美波「もうっ、お兄さんは恥ずかしがり屋ですね」

美波「では、マッサージはじめますね♪」

//SE：オイルを手に取る音

美波「う～ん……♪　やっぱりこのオイルいい匂いです♪　リラックス効果があるっていうのも納得ですねー」

美波「ずーっと嗅いでたいかもしれないです」

主人公（たしかにいい匂いだね）

美波「これを今からお兄さんのお耳につけるんですよー」

美波「お兄さんのお耳がいい匂いになっちゃいますね！　ふふ♪」

主人公（それはいいことなのかな）

美波「お兄さんのお耳がいい匂いになったら……。わたしがお兄さんのお耳をくんくん嗅ぎたくなっちゃいますね♪」

美波「……いや、たぶん嗅ぎます！」

主人公（そんなこと宣言しちゃダメだよ）

美波「えへへ♪　お兄さんだからいいんですよー。そのぐらいのわがまま、聞いてくれると信じてます」

主人公（変なこと信じられちゃってるなぁ）

美波「はい、それではお耳失礼しますね……」

//SE：耳をオイルでマッサージする音

//マッサージしながら雑談

【1】息がかかるぐらい近く

美波「ふふ♪　どうですかぁー。とろとろのオイルをつけて触られると、全然感触違うのわかりますか？」

主人公（うん、そうだね。気持ちいい）

美波「オイルで指が滑りますからねー。割と力強くしても気持ちいい感じになっちゃうんですよ」

美波「それにしても、お兄さん、両耳一緒にヌルヌル……ってマッサージされて、どうですか？」

美波「女の子にこんなことしてもらうなんて、なかなか出来ない体験だと思いますよ？」

主人公（うん。……それよりさ、ちょっと顔近くない？）

美波「……え、わたしの顔が近いのが気になっちゃうんですか？」

主人公（だって、恥ずかしいよ）

美波「そんなこと言っても、このやり方だと近いのは当たり前じゃないですか」

美波「腕をピーンって伸ばしてマッサージなんてしないですよね」

主人公（そうだけど……）

美波「だから、この距離は仕方ないんです♪」

//SE：美波の吐息の音

美波「……あっ、ふふ♪　もしかしてお兄さん……。わたしの息とか気になってるんですか？」

主人公（なんでわかったの？）

美波「お兄さんの顔を見てたらわかりますよー」

美波「わたしが呼吸する度にドキッて、緊張してるような顔してるじゃないですかぁ♪」

美波「もー……まったく。お兄さんは恥ずかしがり屋さんですね♪」

美波「そんなに気にしなくていいじゃないですか♪」

美波「そうだ！　なんなら、顔にふー♪　って息吹きかけちゃいましょうか」

主人公（ちょっと、それはダメだよ）

美波「クスッ。冗談です♪　でも、息が聞こえるのは我慢してくださいね♪」

美波「それに、気になってドキドキしてくれてるのなら、わたし的には嬉しいですから♪」

主人公（そんな……）

美波「まぁ、お兄さん自身がドキドキするのが気になるなら……そうですねー」

美波「ちゃーんとマッサージしている耳に集中してたらいいんじゃないですか？」

主人公（もちろん、耳は気持ちよくていいんだけど。

それでも気になるよ）

美波「耳のオイルマッサージよりも、吐息を気にするほうがおかしいんです。ふふ♪」

主人公（うぅ……）

美波「だって、マッサージしてるのはお耳なんですから。普通は気持ちいいことの方に集中するじゃないですか」

主人公（そうなんだけどさ……）

美波「そうだ、じゃあわたしが気にならないように何かお話ししますね」

美波「それなら、吐息を気にせずマッサージ受けれるかもしれませんよ」

主人公（そうだね……じゃあお願い）

美波「なんのお話がいいかな……。あ、そうそう」

美波「このオイルでのお耳のマッサージはですねー。自律神経が整うとか、そういう効果もあるみたいなんです」

主人公（へぇ、そうなんだ）

美波「といっても、わたしもちょっとネットで見ただけなんで、詳しくはわかりませんけど。えへへ」

美波「でも、お耳をマッサージするのはただ気持ちいいだけじゃないってことです」

美波「だから、ちゃーんと大人しくわたしのマッサージ受けてくださいね♪」

主人公（う、うん）

美波「ふふ♪　気持ちいいことに変わりないんですからいいじゃないですか」

美波「ちなみにですけど……。息がかかるのが気になるっていうことなら、お兄さんの息もわたしにかかってますからね？」

主人公（あっ、ごめん！）

美波「でも、わたしは……その、お兄さんの息だったら気にしないっていうか……むしろ、その、嬉しいというか……」

美波「も、もうっ、こんなこと言う方が恥ずかしいです……」

主人公（そ、そうだね……）

美波「まったく……。大体、お兄さんは気持ちいいとか嬉しいとか、顔に出過ぎなんですよー」

美波「私にだけ……だとしたら嬉しいですけど」

//しばらく黙ってオイルマッサージ

//時間経過

美波「ふふ……。だいぶほぐれてきましたね」

美波「お兄さんのお耳、耳かきの時よりも、すごく柔らかくなってきましたよー」

美波「でも、じっくりとたっぷりマッサージしないとほぐれないのはやっぱり疲れが溜まってる証拠ですね」

美波「本当に……いつもお疲れさまです」

美波「お兄さん、大変なのにいつも頑張ってて。本当にすごいです」

美波「偉いなぁー……っていつも思ってますよ。わたしの尊敬する人は、お母さんとお兄さんですから」

主人公（なんだか照れるね）

美波「……だからわたしに出来る範囲で疲れを癒やしてあげたいなって思ったんです」

美波「だって、わたしがお兄さんに出来ることってそれぐらいしかありませんから……」

主人公（十分嬉しいよ）

美波「……ふふ♪　お兄さんはやっぱりすごいなぁ。いつも優しくて……。本当にかっこいいです」

美波「……旅行が終わったらまたお仕事とかで忙しいでしょうけど。せめてこの旅行の間はたーっぷり疲れを癒やしてください♪」

美波「もちろん、わたしに思いっきり甘えていいんですからね……ふふ♪」

美波「それで、週明けからのお仕事がまた頑張れるのならいくらでも」

美波「その……本当に、わたしに出来ることならなんでもしますからね」

主人公（ありがとう）

美波「えへへ♪　お兄さんにお礼を言われると、なんだか照れちゃいます」

美波「わたしの方がお兄さんにお礼言わないといけないことといっぱいなのに……」

美波「だから、お互い様……ですよ」

美波「それに、大丈夫です。わたしもすっごく楽し

んですから。……えへへ♪」

美波「いっぱいさわれて、楽しそうな顔も嬉しそうな顔も見られたし……」

美波「ね。かなり楽しんでるでしょ？」

主人公（う、うん。そうだね……）

美波「だから、お兄さんは気にしないでください」

美波「さて、そろそろこのマッサージもおしまいでいいですかね」

主人公（ありがとう、気持ちよかったよ）

美波「ふふ♪　わたしも、楽しかったです」

//オイルマッサージ終わり

美波「あっ、そうだ。オイル拭きとらないとですね……」

//SE：立ち上がって歩く足音

//SE：戻ってくる足音

//SE 座る音

【1】

美波「わたしが拭いてあげますね♪」

//SE：タオルで耳を拭く音

美波「いっぱいオイル塗ったからしっかり拭かないとですね……」

美波「あとでヌルヌルして嫌になるかもしれませんから」

主人公（あー。確かに寝る時とかいやかも）

美波「もし、タオルで拭ってもまだ気になる場合は……。そうですねぇ。温泉に入るしかないですね！ふふ♪」

美波「まぁ、せっかくの温泉旅館ですから、何も問題はないですね。温泉が堪能できるだけです！」

〃タオルで耳を拭くの終わり

美波「……はい、これでオイル拭えましたね」

主人公（ありがとう）

美波「あ……なんだか、お兄さんマッサージする前よりすっきりした顔してますね」

主人公（そう？）

美波「かなり満足そうな顔してますよー。これはマッサージの効果ですね」

美波「ふふ。それだけ気持ちよかったってことですねー。よかったぁ……」

【7】耳元で囁き

美波「（いたずらっぽく）気に入ったならまたいつでもやってあげますね……♪　ふふ♪」

○トラック8

■旅館の部屋

【2】

美波「くぅ～……ふわぁぁ……」

美波「ふふ♪　お兄さんと一緒にあくびでちゃいました……♪」

美波「眠くなっちゃったんですか？」

主人公（そうかも）

美波「もういい時間ですし、マッサージもしましたしね。眠くなるのもしかたないです」

【1】

美波「……じゃあ、そろそろお布団に入ります？」

主人公（……でも、いざ寝るってなるとちょっともったいない気もするね）

美波「はい……せっかくの旅行ですからね。まだ寝ちゃうのはもったいない気がしますけど……」

美波「そうだ、お布団に入ってまったりお話しませんか？」

美波「本当に眠くなったらそのまま寝ちゃえばいいわけですから」

主人公（そうしようか）

//SE：布団へと歩く足音

//SE：掛け布団をめくり、中に入る音

【3】隣同士で寝転がっている

美波「ふふ♪　布団くっついてるから、まさにお兄さんのお隣さんですね……♪」

主人公（照れるね）

美波「そんな照れないでくださいよ……。わたしだって、なんだか恥ずかしいのと嬉しいのでよくわからない感じです」

美波「だから全部合わせて、嬉しいってことにしますね♪」

美波「旅行先で、普段と布団も違いますから、なんだかちょっと変な感じですね」

主人公（わかる。枕も違うもんね）

美波「……でも、まさかお兄さんとふたりで来れるなんて思ってなかったなぁ」

美波「……ねぇ、お兄さん。初めてふたりでの旅行でしたけど、どうでした……？」

美波「率直に感想を聞きたいです」

主人公（楽しかったよ）

美波「ちゃんとリフレッシュ出来ましたか？」

主人公（うん）

美波「よかったぁ……。わたしお兄さんを癒やすのが目的だったから。目標達成！　っていう感じで嬉しいです。ふふ♪」

美波「わたしも……。お兄さんと旅行すごく楽しくて……。ずーっとふたりっきりのこの時間が続けばいいなー……なんて考えてました」

美波「……今も、こうやって何気ない話をして……。現実なのに夢みたいです」

美波「だから……。また、こうやってふたりだけで旅行に行きたいです……」

美波「……もちろんお兄さんが嫌じゃなければですが。……いい……ですか？」

主人公（もちろんだよ）

美波「えへへ……。やったぁ。お兄さんならそう言

ってくれると思ってました♪」

美波「次は……そうですねー。今回は山だったので、次は海の見える旅館とか……。あっ、でも雪景色とかもいいですね……」

美波「銀世界の中で露天風呂に入るのとか、すごくよさそうじゃないですか！？」

主人公（たしかに、気持ちよさそう）

美波「あー……。でもやっぱり温泉だと一緒に楽しめないか……」

主人公（一緒に入るわけにはいかないからね……）

美波「今日みたいに、足湯だったら一緒に入れるんですけどね……。雪景色で足湯だけだと体が冷えちゃいそうです」

主人公（あはは、そうだね）

美波「えへへ……。でもこうやって旅行のプラン立てながら想像するのって楽しいですね！」

美波「……お兄さんと色んな所に行きたいなぁ」

美波「1泊じゃなくて、何日かとか。そしたらあまり時間を気にしなくてよさそうですね……」

主人公（その場合、有給とらなきゃだね）

美波「あー……。お兄さんの休みが問題ですね。わたしは冬休みとかありますけど……」

美波「あと、あまり遠いと時間もお金もかかって大変ですね……」

主人公（電車移動も楽しいんだけどね）

美波「あ、でも現実的に考えたら、普通にお部屋でまったりっていう過ごし方もいいですね」

主人公（そうだね）

美波「おうちでお兄さんを癒やすことが出来たら、遠出しなくても、お兄さんの疲れを取ることが出来ますね」

主人公(俺主体なの？　美波ちゃんも楽しまないと)

美波「わたしは……。お兄さんと一緒だったらなんでも楽しいんですが……」

美波「うーん。そうだなー……。あとは……お兄さんに色々な料理を作ってあげたいですね」

美波「旅館の料理……。みたいにはなかなかいかないと思いますけど……」

美波「シチュー以外にも色々作ってあげたいなー。なんて思っちゃいます」

美波「……でも、鮎の塩焼きも今度挑戦してみますね！」

主人公（楽しみにしてるね）

美波「今日食べたものぐらいの美味しさ……。とはいかないでしょうけど……」

美波「ふふ♪　今度調べて練習しておきますね」

主人公（ムリはしなくていいからね）

美波「ふふっ。わたしがしたいだけですから。練習っていっても、美味しいものを作って食べてもらって、笑顔になってもらったり、美味しいって言ってもらいたいからなので」

美波「他にも……色々作れるようになりたいなぁ」

美波「あ……っ！　鮎を美味しくってことは魚を扱えるようにならないとダメですね」

美波「でも、魚をおろすことを覚えてしまえば料理のバリエーションが増えそうです」

美波「そこまでなったら、包丁さばきとかすごく上手くなってそう」

美波「……あっ！　寝ようって布団に入ったのに、ずーっと話しちゃってますね……」

美波「こんなに長話してたら、寝るにも寝れないですよね……。ごめんなさい」

主人公（大丈夫だよ）

美波「……お兄さんがちゃんと寝れるように黙りますね」

主人公（気にしなくていいのに……）

美波「……いえ、わたしも変にテンションあがっちゃってるので。わたし自身、黙ってないと寝れそうにないですから」

主人公（そっか、じゃあもう寝ようか）

美波「お兄さん。ゆっくり寝てくださいね……」

美波「おやすみなさい……」

//しばらく沈黙

//SE：美波が寝返りを打つ音

美波「……うーん」

//SE：再び美波が寝返りを打つ音

美波「……ふぅ」

美波「……お兄さん。起きてますか？」

主人公（起きてるよ）

美波「すみません……なんだか寝付けなくて」

主人公（無理に寝なくてもいいんじゃない？）

美波「……でも、明日のこととか考えたら、もう寝たほうがいいって思うんですよね」

美波「だから、寝たいんですけど……」

美波「……多分、お兄さんが隣りにいて、この部屋がすごく静かっていうのがよくないのかもしれないです」

主人公（よくないっていうのは？）

美波「えっと……。なんていうか。なんだか緊張しちゃって……」

美波「だから、お兄さんにお願いがあるんですけど、いいですか……？」

主人公（お願い？）

美波「えっと、そのですね……。この前みたいに、あの。お兄さんにくっついてみたら良いかもって思って……」

美波「そうしたら、その……。お兄さんのぬくもりで安心できるから……。眠れるんじゃないかなって思うんです」

美波「だから、一緒のお布団に入っても……いいですか？」

主人公（美波が一緒に寝たいならいいよ）

美波「えっ！　いいんですかっ！」

主人公（うん）

美波「……ありがとうございますっ！」

美波「じゃあ、そっちのお布団に入らせてもらいますね……」

//SE：美波が布団に入ってくる音

【3】添い寝

美波「えへへ……♪　お兄さんほんと優しいです」

美波「（小声でつぶやくように）思い切って言ってよかったぁ……」

美波「……ねぇ、お兄さん。もっとくっついてもいいですか？」

主人公（……いいよ）

//SE：ギュッとくっつく音

美波「えへへ……。お兄さんあったかいです」

美波「すー……。ふふ♪　お兄さんの匂い……♪」

主人公（ちょっと、匂いって……）

美波「ふふっ。お兄さん、そんな恥ずかしがってるところもかわいいです♪」

主人公（誰でも恥ずかしいと思うよ）

美波「……でも、もうちょっと嗅がせてください」

主人公（い、いいけど……）

美波「すー……。はー……。すー……はぁ……」

美波「ふふ♪　もう大丈夫です」

美波「……不思議なんですけど。お兄さんにくっついて、お兄さんの匂いを嗅ぐとホッとするんです♪」

主人公（……それならいいけどさ）

美波「……あの、お兄さん。もうちょっとお話してもいいですか？」

主人公（うん、いいよ）

美波「えっと、前にお兄さんのお家に泊めてもらったときがあるじゃないですか……」

美波「その時、お兄さんに優しくしてもらって……。色々悩みを聞いてもらったり、わたしのわがままを聞いてもらったり……」

主人公（そんなこともあったね）

美波「わたし、すごく嬉しかったんです。ありがとうございます」

主人公（お礼を言われるほどじゃないよ）

美波「……わたし、実はお兄さんのこと。前からずーっと気になってたんです」

美波「この間泊めてもらったよりも前からですよ」

主人公（……ありがとう）

美波「えっと、それで……。気になってる状態で優

しくされたり、悩み聞いてもらったり……」

美波「わがまま聞いてくれたり。……その。添い寝もしてくれて……」

美波「それで……。その……あの……。えっと、その……」

主人公（……）

美波「（小声）うぅー……。がんばれわたし……」

美波「……コホン。えっと、ですね……」

美波「前から気になってたんですけど。この間からは、その……本当に……好きになってしまったんです！」

美波「わ、わたし。こんな風に人を好きになるのが初めてでその……」

美波「伝えるのも恥ずかしがって上手くできなかったんですけど……」

美波「そうしたら、お兄さんとふたりで旅行に行けることになって……」

美波「チャンスだって思う気持ちもあって、でもお兄さんに疲れを癒やしてもらいたい気持ちも、もちろん本当にあって……」

美波「だから、いっぱいお兄さんを癒そうって色々調べて、頑張って……」

美波「それで、耳かきも、マッサージも一生懸命やったんです」

美波「正直言うと、わたしの気持ちは伝えようか、黙ってようかってすごく迷ってたんです」

美波「でも、お兄さんは優しくて……。一緒に居たら楽しくて……。こうやって横にいると安心して……」

美波「いつもかっこよくて……。わたしがからかったらちゃんと反応してくれて……」

美波「それが嬉しくて、わたしが調子に乗ってもちゃんとそばにいて守ってくれて、いつもわたしを心配してくれて……」

美波「……わたし、本当にお兄さんのこと大好きだなって何度もいっぱい……いーっぱい再確認しちゃって」

美波「こんなに好きが溢れちゃったら、伝えられずにいられるわけないじゃないですか……」

美波「……だから、今から思い切って言うこと。一度しか言わないからちゃんと聞いててくださいね」

主人公（……うん）

//SE：美波が深呼吸する音

美波「ふぅ……。いいですか、じゃあ。言いますからね」

主人公（うん）

美波「わたし、お兄さんのことが大好きです……。わたしと、恋人同士になってください――っ！」

美波「（小声）あぁぁ……言った。言っちゃったぁぁ……。はぁ～……。ふぅ……」

主人公（……ありがとう）

美波「あぁ、わたし……思い切ったことしちゃいました……」

美波「ドキドキして……。おかしくなりそうです」

主人公（よく頑張って言ってくれたね）

美波「あぁ……。お兄さん。もっとぎゅってしていいですか？」

主人公（……いいよ）

//SE：ギュウと抱きしめる音

【3】密着するぐらい近く

美波「……ありがとうございます」

主人公（それで、返事だけど……）

美波「あ、あぁ……。告白の返事……。聞きたいけど……。聞きたくないですっ！」

美波「だって……。もしダメだったら……。わたしの片思いだったらつらすぎますから……っ！」

美波「せっかく、楽しい旅行なのに……。うぅ……だから聞きたくないですよ……」

主人公（……本当に聞かなくていいの？）

美波「……うぅ。でも、告白をしたからちゃんと返事は聞かないと……」

美波「……怖いけど、わたし聞きます」

主人公（じゃあ、言うよ）

美波「あぁ、やっぱり待ってください！」

美波「ちょっと、深呼吸しますから……だから、もうちょっと待ってください」

美波「す――……。はぁ――……。す――……。はぁ――……。ふぅぅぅぅ……」

美波「……覚悟、決めました」

美波「お兄さん……。返事、聞かせてください」

//SE：美波が生唾を飲む音

主人公（俺も美波のことが好きだよ。……俺で良ければおねがいします）

美波「え……っ！　ほ、本当ですか――っ！？」

主人公（嘘なんか言わないよ）

//美波が感極まって涙を流しだす

美波「わたしでいいんですか……。うぅ……うぅ……っ」

美波「あは……ぐずっ。あはは……。なんだか涙が出てきちゃいました……」

美波「うぅ……ぐず……。嬉しくて……。ホッとして……うわぁ……。なんか色々な感情がぐじゃぐじゃになってますぅぅ」

美波「ぐず……。えへ、えへへ……♪　ぐずず……。たった今から、わたしたち恋人同士なんですね……！」

主人公（そうだよ）

美波「あぁ……♪　ぐず……。嬉しい……。嬉しいですぅぅ」

美波「ぐず……。あ――……。ホント思い切って告白してよかったぁぁ……」

主人公（よしよし……）

//SE：頭を撫でる音（主人公が美波に）

美波「はぁぁ……♪　お兄さんに頭なでられてるぅぅ……」

美波「ぐず……。お兄さんの手……おっきくて温かいです……♪」

美波「えへへ……♪　えへへへ……♪」

主人公（もう泣き止んだ？）

美波「ふふ♪　まだ泣き止んでないので、ナデナデ続けてください♪」

主人公（わかった）

美波「あぁ……嬉しいなぁ……」

美波「お兄さんとお付き合い出来るなんて、夢みたいです」

美波「……あっ！　もしかして、夢……じゃないですよね？」

主人公（夢じゃないよ）

美波「さっき、おやすみの挨拶してから……。わたし寝ちゃってるなんてこと……」

主人公（大丈夫だよ）

美波「ふふ♪　現実ですよね……。はぁ。嬉しすぎて夢でもおかしくないって思っちゃいましたよ。あはは」

美波「ふわぁ……（あくび）。安心したら、なんだか眠くなってきちゃいました……」

//ここからかなり眠そうな感じで

主人公（うん、寝ていいよ。無理しないで）

美波「……わたしが寝てる間にどこかいかないでくださいね」

主人公（どこにも行かないよ）

美波「……だって、目が覚めて、お兄さんが居なかったら……わたし……」

主人公（大丈夫だよ）

美波「……そうだ……手握ってもらえませんか？」

美波「ふふ、手を握ったまま眠ったら、お兄さんをずっと感じられるじゃないですか」

美波「それに、起きた時にもすぐ近く感じられますから……」

主人公（なるほどね）

美波「……わたしだけじゃなくて、お兄さんにも感じてほしいんです」

美波「……お互い、存在を確かめあいたいんです」

美波「……だから……手……握ってください……」

主人公（いいよ）

//SE：手を握る音

美波「……ありがとうございます。……ふふ♪　嬉しい……」

美波「それじゃ……お兄さん……おやすみなさい……」

主人公（おやすみ）

美波「えへへ……♪　お兄さん……♪」

美波「……お兄さん♪」

主人公（なに？）

美波「クスッ。ただ呼んだだけです……♪」

主人公（もう、早く寝るよ）

美波「ふふ♪　ちゃんと寝ますよ……♪」

美波「……でも、その前に……」

//SE：美波が近づく音（布のこすれる音）

【3】囁くように

美波「……ちょっとだけ……。大胆なことしちゃいますね……」

//SE：美波が頬にキスする音

美波「……ふふ♪」

//SE：美波がごろんと寝転がる音

【3】

美波「……おやすみなさいっ♪」

【3】だんだん眠くなっていく声で

美波「……ふふ……お兄さん……♪」

美波「……ずっと……ずーっと仲良くしてくださいね……」

美波「……浮気とかしたら……許しませんからぁー……」

美波「ふふ……♪　……。すー……すー……」

美波「んん……。すー……。お兄……さん……♪」

美波「大好き……です……よ……。すー……」

//数分寝息（だんだんフェードアウトしていく）

//END